

TOEIC 300点以上を目標とする効果的教授法

— 3年次学生対象の授業実践を通して —

桑 本 裕 二

An Effective Teaching of TOEIC Test Aiming at the Score of over 300 : A Case Study of the Classes for 3rd Year Students

Yuji KUWAMOTO

(2007年11月15日受理)

This paper describes an effective teaching method how to get the score of over 300 in TOEIC Test. Compared to the average score of 446 of the standard applicants of TOEIC IP Test (the data were surveyed in 2006), the average score of 3rd year students in our college is said to be very low (around 300). I suggest that such relatively easy questions as in Part I or II for the listening comprehension are the most effective to teach students with the score of around 300. In fact I was able to rise the score of the TOEIC Test of the students in 3M in 2006 up to around 300 on the average by this method. To a further approach to get higher score, we need to find more effective way to teach 4th and 5th year students to get, ultimately, up to 470 (the minimum score of the Rank C (cf. the average score of new employees in 2006's TOEIC IP Test : 466)) in the future.

1. はじめに

秋田高専における英語教育のなかで、TOEIC テストに対する取り組みは、近年の就職、進学へ向けての様々なニーズに対応して、避けることのできない課題であり、学生に対する効果的な教授法を模索することは、英語担当教員にとって責務であるといえる。ところが、TOEIC テストの到達スコアと、それに見合う英語運用能力、また、TOEIC テストの平均的受験者の標準的な語学力と、本校の学生の平均的英語運用能力を相互的に考慮する場合、本校の学生にとって最適の語学技能検定試験であるとは言い難い。

現在のところ、本校3年次学生が、TOEIC 受験と授業による TOEIC 対策の重点的な取り組みの対象となっており、当面は全員300点以上を目標としているものの¹、ここ数年の実績で、平均点で300点前後という現状である。

¹ 2006年11月に審査を受けた秋田高専の JABEE 基準は、専攻科の TOEIC 400点相当以上を修了要件としている。

本稿は、筆者が2006年度に3年次を対象に行った TOEIC 対策の授業において、平均300点以上を達成するために有効であったと思われる教授法の実践を報告したものである。「目標300点 (以上)」という、平均的 TOEIC 受験者からすれば極端に低いスコアの達成のためには、Part I, II などの比較的簡単な問題の反復練習が最も効果的であり、それらの重点的な対策演習の授業への導入の実践により担当授業受講者のスコアが目標をほぼ達成したことをデータとともに報告する。さらに、今後に向けてのさらなるスコア向上に対して必要なことを考察し、4・5年次における英語授業のありかたについての指針を提言する。

2. TOEIC スコアと英語運用能力

TOEIC テストは、リスニングセクションとリーディングセクションの2部構成でなっており、それぞれに問題が100問ずつ、合計200問の4択、もしくは3択の客観式問題となっている。それぞれのセクションで正解数に応じて評価される換算スコアがあ

り、その合計でトータルスコアが示される。おのおの5点刻みに5～495点に換算されるので、結果的にトータルスコアは10～990点となる。

このトータルスコアと、期待されるコミュニケーション能力レベルの相関は、TOEICの実施団体である財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会によると、以下のとおりである（(財)国際ビジネスコミュニケーション協会 2007c）。

表1 TOEIC スコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表

レベル	TOEIC スコア	評価 (ガイドライン)
A	860	<p>Non-Native として十分なコミュニケーションができる。 自己の経験の範囲内では、専門外の分野の話題に対しても十分な理解とふさわしい表現ができる。 Native Speaker の域には一步隔たりがあるとはいえ、語彙・文法・構文のいずれをも正確に把握し、流暢に駆使する力を持っている。</p>
B	730	<p>どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている。 通常会話は完全に理解でき、応答もはやい。話題が特定分野にわたっても、対応できる力を持っている。業務上も大きな支障はない。 正確さと流暢さに個人差があり、文法・構文上の誤りが見受けられる場合もあるが、意思疎通を妨げるほどではない。</p>
C	470	<p>日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる。 通常会話であれば、要点を理解し、応答にも支障はない。複雑な場面における的確な対応や意思疎通になると、巧拙の差が見られる。 基本的な文法・構文は身につけており、表現力の不足はあっても、ともかく自己の意思を伝える語彙を備えている。</p>
D	220	<p>通常会話で最低限のコミュニケーションができる。 ゆっくり話してもらうか、繰り返しや言い換えをしてもらえば、簡単な会話は理解できる。 身近な話題であれば応答も可能である。 語彙・文法・構文ともに不十分なところは多いが、相手が Non-Native に特別な配慮をしてくれる場合には、意思疎通をはかることができる。</p>
E		<p>コミュニケーションができるまでに至っていない。 単純な会話をゆっくり話してもらっても、部分的にしか理解できない。 断片的に単語を並べる程度で、実質的な意思疎通の役には立たない。</p>

表1のそれぞれのランクに記されている内容と、真に国際的なコミュニケーションを行うことを望まれる、あるいは要求される現状とを結びつけるならば、ランク B 以上と考えるのが妥当である。これ

を裏付ける根拠は、TOEIC LPI の要望スコアや、英語教員に望まれる基準となっているのが730点以上ということなどである。

TOEIC LPI (Language Proficiency Interview) は、TOEIC テストが、「聞く」「読む」という受動的な能力を測定することに対し、「話す」という能動的な英語運用能力を評価することを目的として開発されたもので、TOEIC の管理するホームページ「TOEIC LPI とは (URL: <http://www.toeic.or.jp/lpi/about/what>)」に、「目安として TOEIC 730点以上の英語力をお持ちの方に受験をお勧めいたします。」と記載されている。鳥飼 (2002: 56f.) は、TOEIC LPI に要望されるスコアの基準 (730点以上) について、「730点以下ということは英語の基礎が不十分なのであるから、読む、聞くの学習をやり直した上でないと、話す力を測定しても意味がない (下線は筆者)」とまで言っている。

山田 (2005: 161) は、文部科学省が「戦略構想」の中で英検準1級、TOEIC 730点以上、TOEFL 550点以上を英語教員に望まれる英語力の基準として掲げた例を引き合いに出し、その基準の妥当性は検討の余地があるとしながら、一般的な見地として、「教える」側の資質として TOEIC 730点以上という点がとらえられていると指摘している。

次に、実際の TOEIC テスト受験者に関するデータを検討してみる。(財)国際ビジネスコミュニケーション協会 (2007b) によると、様々な集団の平均スコアは以下のとおりである (データは2006年度実施分の IP テスト²の平均)。

表2 2006年度実施 IP テストの集団別平均点

集団	IP テストスコア
企業・団体 (新入社員)	466
企業・団体 (全体)	465
全体平均	446
大学	430
学校 (全体)	424
短大	395
高校	391
高専	349

IP テスト全体の平均は446点である。さらに正式な公開テストの場合は、全体の平均点は2006年度で570点であった。つまり、100点以上の差が生じてい

² Institutional Program. 団体特別受験制度に基づく、学校、企業単位で受験できる準公式なテスト。本校における TOEIC テスト対応は、IP テストを原則としている。

ることになる。だから、公開テストも含めた実際の受験者の平均点は、さらに高得点だということになる。

3. 秋田高専において目標とするスコア

この現状の中で、表2からは、「高専」のスコアの平均点は企業・学校（中学以下を除く）の中では最低であり、しかも直前の「高校」と比べても42点差と、水をあけて低いことがわかる。

秋田高専においては、2001年度より3年次学生を主な対象としてIPテストを実施してきている。IPテスト実施以降の第3学年在籍学生に対しては、開講授業「英語」（通年週4時間）の授業をもっぱらTOEIC対策にあて、年度末の時期（通常1月末～2月初めの休日）にIPテストを実施してきた。これは、就職に向けて、また、当面の最近の傾向としての大学進学に対する英語運用能力を確認、さらにその向上を目指すものであった。IPテストの受験対象者は3年生全員と、その他の学年（専攻科も含む）の希望者である。表3は、毎年恒例で行っているIPテスト³の3年次学生の平均点の年次ごとの実績である。

表3 秋田高専におけるIPテスト3年次学生の平均点

年度	M	E	C	B
2001	297	292	266	290
2002	343	338	298	322
2003	263.8	319.7	339.6	255.2
2004	292.3	287.0	263.7	253.6
2005	331.4	306.7	293.5	339.8
2006	294.8	308.0	277.9	284.8

※黒字は筆者担当分

2001年度から2006年度まで6ヶ年の実績があるが、同一年度のクラスによるばらつき、または、年次による得点の増減はあるものの、おおむね300点前後という結果である。つまり、表2における「高専」全体の平均点よりずっと低く、また、全体の平均点から比べるとさらに差があるということになってしまっている。

この状態を将来にわたって少しでも向上させなければならないというのが、英語担当教員に課せられた責務であると自覚しているが、まずは、具体的な、希望も含めた目標を定める必要があると思う。上記

³ 年1回1の3年生対象のIPテストの他にも、毎年数回希望者に対してIPテストを実施してきている。

で、問題なくコミュニケーションを行うための最低のTOEICスコアとして、730点が妥当である旨を述べたが、それはすぐに対応するにはあまりに困難であるとして、秋田高専の3年次学生に対して当面目標とすべき点について考えてみたい。

そもそもなぜ本校においてTOEIC IPテストを実施し、またある程度のスコアを要求すべく対処してきたのかというと、卒業後の就職先の企業で要望される（らしい）英語運用能力に対応するためである。大学進学においても昨今は重視の傾向にあるが⁴、行き着く先は同じで、大学卒業後の進路である企業での要求に対応するというこのためにTOEICスコア向上を目指しているといえる。そうだとすると、表2における「企業・団体（新入社員）」（ただしデータは大卒）の平均466点というのは目標の一つと考えていいだろう。ちなみに、この点は表1のランクCの最下端付近に当たっており（ランクCは470～730）、ランクCの記述内容からしても妥当な目標となりうる。

また、毎年秋田高専で、校内実施のTOEIC IPテストの成績優秀者に対し、校長から「学術奨励賞」という賞が授与される。これに該当するのはIPテスト大学平均点であり、2006年度の場合は表2にしたがい、430点以上であった。これも、上記の新入社員平均点を最下点とするランクCに準ずるものとして、学校として奨励するに足るものと認識していることを示すものである。

秋田高専専攻科では、取得を要望する最低限の点として、2005年度以降入学者（修了年度は2006年度以降）に対して、「TOEIC 400点相当以上」が修了要件の一つとして明文化された。これは本校専攻科学生に対して、原則的にはTOEIC IPテストもしくは公開テストにおいて400点以上をとることが義務づけられたことを意味する。これに連動する形で、本科生に対しては、卒業までに最低300点をとることを奨励してきている。これは強制力を持つものではなく、あくまでも要望事項であるが、学校の本科生に対する英語運営の当面の目標と筆者は認識している。

「卒業までにTOEIC 300点以上」を目標とするために、その2年前の3年次においてどのような指導が有効なのであろうか。表3をみると、おおむね平均点は300点に近いものとなっていることがわかる。個々のクラスにおける授業は、当該年度の方針や担当教員の指導法、受講学生の基礎的な学力などによって様々となっており、300点をはるかに超え

⁴ 語学授業のクラス編成、単位振替制度などに対応している。

るものから、250点程度のものまで存在する。表3における太字の数値は、筆者が授業担当したクラスの実績である。2004年度3Cを除けばほぼ「平均300点程度」を達成したことになる。

2006年度に筆者が担当した3Mにおいて、受験者の得点分布は以下ようになる。

表4 2006年度3M TOEIC IP テスト得点分布

スコア	人数
400-	1
350-395	5
300-345	14
250-295	17
200-245	4
-195	1
合計	42 ⁵

このクラスでの実績は平均点294.8で、平均点300点にはわずかに及ばなかった。しかし、この得点分布をみると、300点をわずかに下回る250点以上のところに人数が集中しており、この層の受講者の能力をすこしでも上げることができれば、平均点300点以上、さらに卒業時全員300点以上の目標を達成できるはずである。

次節では、この「TOEICスコア300点以上」を目標とするために有効であると考えてきたことを述べる。これは、2006年度3Mの授業で特に工夫して取り組んだ点であり、授業を実践しての反省も含めた考察である。

4. TOEIC 300点獲得に有効なこと

4.0.

第2節で述べたように、TOEICテスト全体からみて、適度な英語運用能力という点からして、300点というスコアはあまりに低すぎるといって過言ではない。しかしながら、第3節で考察したように、300点を目標にせざるを得ない本校本科の現状において、どのようにすればこの目標を達成できるのかということを考察した。

TOEICテストはリスニングセクションとリーディングセクションの2部構成であるが、それぞれの問題形式は次のようになっている。表は2006年度のIPテストまで使用された旧方式のものでそれ以降

は形式が一部変更されている⁶。2006年度に本校で実施したIPテストは旧方式で行われた。

表5 TOEICテスト問題形式(旧方式)

リスニングセクション(45分間)			
I	Photographs	写真描写問題	20問
II	Question-Response	応答問題	30問
III	Short Conversations	会話問題	30問
IV	Short Talks	説明文問題	20問
リーディングセクション(75分間)			
V	Incomplete Sentences	文法・語彙問題	40問
VI	Error Recognition	誤文訂正問題	20問
VII	Reading Comprehension	読解問題	40問

これに基づき、リスニング・リーディングのそれぞれに対する有効な対策法を示す。

4.1. リスニング対策について

本校学生の英語のリスニング能力に関しては、桑本(2006)で示したとおり、TOEIC IPテストの実績、英検の実績からして、(少なくともリーディング能力との比較において)ほぼ学年相応の能力があるとみなしていい。また、菅原(2005)は、リスニング強化に重点をおいた授業方式がTOEICスコア向上に有効であると報告している。以上をふまえると、特にリスニング強化に重点をおく授業は、ある程度の基礎力のある学生にとってはリスニングセクションでの正解率を高めることにつながると期待できる。

本校学生がTOEICテストに取り組むにあたっての最大の弱点は、扱われているトピックや状況に不慣れである点である。学生生活では経験したことのないような企業のオフィスでのやりとり、海外出張の提出文書の処理、営業上のトラブル対応など、適切に英語を聞き取る以前の背景知識がほとんどなく、その状況下で理解するには相当の忍耐力、集中力を要する。さらに、第2節で述べたように、平均的な受験者の平均点はずっと高スコアの域にいて、そのような受験者と全く同じ問題に取り組むわけだから、当然理解の及ぶ問題の率は下がる。また、フルスコア(990点)を目指す受験者にとっても手応えのある難易度の問題とならざるをえないため、300点程度の受験者には極めて難解な問題に思えるのである。特にリスニングセクションでは、難易度が話すスピードに依っている傾向が強いように感じられる。

このような状況の中で、筆者は比較的容易である

⁵ 在籍44名中、留学生1名、欠席者1名を除く。

⁶ 公開テストでは2006年度5月実施分から新方式が採用されている。

と思われる形式は Part I と Part II であると感じる。

Part I は、1枚の写真に対する4種類の叙述(A~D)から正解を選択するものである。一つ一つの叙述は短い1文であり、写真は風景や部屋の様子などがほとんどで、企業などが背景の一般社会ならでの状況というものはそう多くないし、それを考慮しなければ解答できないとも思われない。授業による問題演習でも、正解率は常に60%~70%、10問連続で行えば全問正解する学生もいたほどで、このパートは強化する意味があると考えられる。

Part II は、短い質問に対する応答(通常は質問に対する表現どおりの答であるが、「わかりません。」「xxxに聞いて下さい」などの変則的な解答も存在する)を選ぶものである。この問題形式は、高専学生にわかりにくい一般社会の状況下が主であるが、多くは簡単な英会話における反射的な決まり文句であったり、質問文の種類(yes-no 疑問文 vs. wh-疑問文)などによってある程度応答が予測できたりするので、学習者は聞き取りがしやすく、また、教える教員は適切な指導を行いやすい。そして何より、この Part はリーディングも含めた中で唯一3択問題になっているので、さらに取り組みやすくなっている。

Part III, Part IV は、スコア300点前後の学生にとっては聞き取り、理解ともに極めて困難であると感じられる。

Part III は、2人の話者による対話が1往復半なされる内容を聞き取り、それぞれに用意された質問に対する解答を4つの中から選択するものである。このパートは発話のスピードも速く、音の聞き取りそのものが困難であることと、会話の場面も一般社会、特に会社や企業での日常のものがほとんどとなり、高専生になじみがないため、内容の理解は非常に困難となる。

Part IV は、1人の話者の演説、放送、挨拶などの発話に対し、2~4問の問題が当てられ、それらに対して解答するものである。これは、Part III 同様、発話のスピードが速いことに加えて、1つのナレーションに対して複数の問題に対応しなければならず、スコア300点程度の能力のものにとってはさらに困難な内容となる。

これまで数年にわたる3年生向けの授業での演習を通して、現段階での本校3年生の実力から考えて、リスニング力の向上を Part III, IV を使って行うことはほとんど意味がないと判断される。スコア300点程度であれば、それ相応の能力に見合った演習をする必要があり、リスニングセッションに関し

ては、Part I, II のみを扱うのが適当で、Part III, IV はもう少し英語運用能力のついている受講者に対しての効果的な教授法があると考えられる。

4.2. リーディング対策について

リーディングについては、たとえば、2006年度の本校3年生の実績でリスニングと対比させると次の表のとおりとなる。

表6 2006年度実施 IP テスト 3年クラス別平均点

	Listening	Reading	total	L-R 差
M	188.3	106.4	294.8	81.9
E	192.9	115.1	308.0	77.8
C	173.2	104.7	277.9	68.5
B	183.9	100.9	284.8	83.0

いずれのクラスの実績でもリーディングのスコアが低くなっている。これは、IP テスト全体平均をみても同じ傾向であるため、本校実績のみがリスニングに偏重しているとは必ずしも言えないが(2006年度 IP テスト全体:リスニング:リーディング=254:192, 差:62)、全国平均に比べて差が大きいこと、そして、本校実績のリーディングスコア100点前後というのは、期待できる得点率は、100問中30問程度正解ということになり⁷、文法の基礎ができているとはとてもいえないことが明らかで、問題形式に対する効果的な対策を考察する以前に、本格的に TOEIC 対策に応じる3年次以前の1・2年次の英語カリキュラムにおいて、文法・読解の基礎を重視することを検討する必要がある。

5. 実践

5.1. 2006年度 3M の平均的英語力の現状

筆者が授業実践した2006年度 3M の英語力に関していくつかのデータを示す。

表7 2004年度 1年生一斉テスト(英語)結果

	M	E	C	B	平均
平均点	57.0	57.0	57.4	60.1	57.9

⁷ この換算スコアは(財)国際ビジネスコミュニケーション協会(2005, 2007a)の掲載された公式問題(2回分)に対する換算表から推察できるものである。なお、旧方式のものはすでに絶版となっており、(財)国際ビジネスコミュニケーション協会(2005, 2007a)は新方式のものであるが、正解率と換算スコアの関係はほぼ同じに設定されていると考えられる。

表7は、2006年度3年次学生がその2年前（2004年度）の入学時に受けた一斉テストの結果である。これにより、同一学年における相対的な学力に注目すると、機械工学科（当時1M）は電気情報工学科（当時1E）とならんで最も平均点が低いことがわかる。

2年次で取得を奨励している英検準2級の当該学年終了時（2005年度）での実績は次のとおりである。

表8 2005年度第2学年英検準2級取得状況

	M	E	C	B	全体
在籍者	42	46	45	42	175
取得者	21	15	24	16	76
率(%)	50.0	32.6	53.3	38.1	43.4

各クラスごとの分布が表7とはかなり異なっているのがわかる。当該クラス（当時2M）は、2C（当時）とほぼならんで英検取得率が最も高くなっている。この2つのクラスはいずれも筆者が授業担当したものであり、その点からしても、第2学年修了までにこれら2つのクラスはほぼ同等の英語力をもっていたといえてよい。

これらの結果をふまえて2006年度3MのTOEIC IPテストの結果（表6）を見ると、英検取得率では突出して低かった3Eの躍進は別として、当該年度開始直前にほぼ同等の英語力と見なされた3Cや、3Bよりはるかに高得点を示す結果となった。これは、第4節で述べた考察に基づく実践が効果的に働いたことを裏付けるものである。次節にその実践を報告する。

5.2. 授業の実践

第3学年で開設されている「英語」（通年週4時間、4単位）は、数年来TOEICテスト対策に当てられ、当該年度末に実施しているTOEIC IPテストの受験に対応している。現行では全学科共通のシラバスに基づいて授業運営されるが、細部は各担当教員に任されている。2006年度は筆者の他に常勤教員1名（2クラス）、非常勤講師1名（1クラス）が授業担当に当たっていた。

基本となる授業進行は、週4時間のうち、2時間を情報処理センターの情報教育ルームでのオンライン英語学習システム「アルクネットアカデミー」をもちいた学習指導、あと2時間を教室でのその他の活動にあてられた。

表9 2006年度3年次「英語」の授業時間配分

時間数	2	2
場所	情報教育ルーム	教室
内容	・オンライン学習	・リスニング ・リーディング

教室で行う授業では、リスニング教材として『TOEIC テスト リスニング強化でまずは400点』（千田潤一・鹿野晴夫・水島孝司著、明日香出版社、2002）を用い、簡単な対話形式の文の反復聞き取り、音読などを演習し、アルクネットアカデミーだけでは不十分な文法・読解対策として、問題集（『TOEIC テスト新模試600問』アルク、2003）のリーディングセクションを演習した。

教室で行う週2時間の授業において、IPテスト実施（2007年2月3日）直前の時期を見込み、2007年1月以降の授業をすべて以下の方式に変更した。

リスニング対策

時期：2007年1月11日、18日、25日、2月1日授業
分計4回

内容：TOEIC Part I, II のみの問題演習、1回
（100分授業）100問程度

使用問題集：

『TOEIC テスト新模試600問』アルク、2003

『TOEIC テストスーパー模試600問』アルク、1998

この期間の授業で特に重点をおいたことは、とにかく学生に対してPart IとPart IIに注意を集中させること、また、解説はさておき問題量をこなすということであった。この授業実践を通して、学生はPart I, IIは、それでも容易な部類に入る問題形式であることがわかり、そのような内容であればどうにか集中力が持続することを発見し、そういった体験をふまえて本番のIPテストに臨むことにつながっただろうことが推察される。この実践をうけて、表6に示した結果がある。入学当初はさほどでもなかったクラスの平均的な評価スコアが、比較的容易な内容の問題演習に偏重した教授法を行うことにより、そうしなかったクラスよりも高いものになることが実証された。

5.3. 今後の3年次授業へむけて

筆者は前節の報告のとおり、幾分偏りのある方法で授業実践を行い、ある程度の結果を残すことができた。現在のところ、3年次に対する授業は原則的に全教員一律の授業形式を保ち、部分的にのみ各担

当教員に個別の運営を任されているに過ぎない。今後、一つの有効な手段として筆者が行った方法を3年次授業で他の教員も一律行うことを英語科目担当教員全体としての方針とすべきかどうかに関しては慎重にならなければならないだろう。今回筆者が行った方法が、あらゆる状況、場合において有効かどうかはわからない。現段階での3年次学生の英語力が、たとえば表3における300点以下のクラスがすべて300点以上となるとすれば、かなりの向上といえるだろうが、そのためにはそれぞれの担当教員が独自の教授法をさらに研究し実践していくことが望まれるのみである。

本校の英語教育全般としてみた場合、今後の授業運営に関して、今よりも授業担当教員ごとに任せられるものに変更していくことも、様々な結果とともに方法論の可能性が広がるという意味で検討している点であると考ええる。

6. さらに高得点をめざすために

6.0.

第2節で述べたように、TOEICテストで達成を確かめるに足る本来の英語運用能力は、本校学生の平均的能力とは相当の差がある。第3節では、高専生が卒業を見越して目標とすべきスコアは、新入社員平均点、ランクC最下点付近の470点とみなすのが妥当であると指摘した。そうすると、現段階で卒業までに全員300点以上という校内における目標を、将来的には平均470点程度に高めることが究極の努力目標であるといえる。3年修了時から卒業までの2年でどのような指導をすれば有効であるのかについて考えてみる。

6.1. リーディング

リーディングについては、基礎力の低さから、低学年次における文法強化が必要であるが、とりあえずIPテスト全員受験を経た高学年次学生に対する授業では、速読の訓練が必要となるだろう。特にPart VIIでは精緻な読みよりも、すくいとり(skimming)やざっと目を通すこと(scanning)が要求される。これらを体系的に授業で演習する必要がある。

6.2. リスニング

3年次の授業で、Part I, IIの演習を重点的に行うとして、次の段階としてはPart III, IVの本格的な導入と反復練習により、細部への聴解をうなが

す。音声の聞き取りに加えて、一般社会での様々な状況にも慣れさせるなど、総合的な聞き取り能力を養成することが必要となる。

6.3. オンライン英語学習システム「アルクネットアカデミー」の効果的利用法について

2006年度より3年次英語および専攻科英語において、オンライン英語学習システムである「アルクネットアカデミー」を用いて授業を行っている。本校に導入されたコースは「初級・中級者のためのTOEICテストスコアアップコース」で、名称から察するに、初歩的な内容であると思われたが、筆者が2006年度の3年次授業(本校で報告した3Mの授業)を実践して感じることは、実際には、特にリスニングのスピードが速く、自習用に学習者が自分に合った速度に調節できるものの、問題演習などは大変難しいという印象であった。今後3年次授業に継続的に使っていくことは考え直す必要があると思われた。

また、当システムはもともと自習用に考案されたものであるので、授業で教師がリードして解説など加えるという展開には不向きであることが、実践を通して体感された。今後は、学生の自習用として開放し、適宜進行状況を把握するという方法に切り替えるべきであると思う。

6.4. 高学年の英語教育で必要な授業方法とTOEIC

本6節は、あくまでもTOEICテストでの高得点をねらうために授業を通して実践できる可能性を述べたものであるが、本来の高学年教育でもっとも必要なことは、桑本・菅原(2007)で述べたように、長文読解とプレゼンテーション能力の養成である。そのため、TOEIC対策だけに時間を割くことができないという現状は変わらず、これの実現のためには英語単位の増設、担当教員の増強など、抜本的な改革が必要になろうかと思う。また、山田(2005:181)の指摘にもあるように、英語能力検定試験はあくまでも受験者の英語力を測るためのものであって、それによって受験者の能力を高めるためのものではないから、授業で問題対策ばかりをし、ややもすると解答の形式的なテクニックを探るといった本末転倒な方向に教授法研究が進んでいかないと限らない。

検定試験対応は、英語教育全体に対しては、補助的な位置付けにすべきなのかもしれない。

7. まとめ

以上、2006年度3Mに対して行った授業の実践を通してTOEICテストへの対応のしかたについて論じた。

TOEICテストの標準的な受験者の目標スコアは730点以上と考えるのが妥当であり、本校3年次学生のご数年の実績は平均で300点前後で、これは730点に比べると極端に低いと言わざるをえない。300点前後の3年次学生に対しての効果的な授業教授法は、初歩的である、特にリスニングセクションのうち、Part I, IIの集中的な反復練習が効果的であることがわかった。その際、初歩段階では極めて難解なPart III, IVに対する対策はほとんど行っても意味がなく、全く対応しなくてもこの段階ではかまわない。

この方法で、TOEICクラス平均300点以上はほぼ達成可能であるが、様々な状況からして本校卒業までにランクCの最下点である470点を将来的な目標にしたいところである。そのためには、3年次以降の、4・5年次の英語科目に対して、リーディング、リスニングのPart III, IVなどの難解な形式に対する具体的な教授法を画策する必要があるが、桑本・菅原(2007)では高学年ではプレゼンテーション能力養成も見込んだ精読中心の長文読解が最も効果的な授業方法であると報告した。TOEICや英検などの客観的な外部評価による英語能力の指標をどのように本校の英語教育に反映させていくべきなのか、専攻科における効果的な英語教育法のありかたも含めて、本質的に考えていかなければならない時期にきていると思う。

参考文献

(財) 国際ビジネスコミュニケーション協会『TOEICテスト新公式問題集』(財) 国際

ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 (2005)

(財) 国際ビジネスコミュニケーション協会『TOEICテスト新公式問題集 Vol.2』(財) 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 (2007a)

(財) 国際ビジネスコミュニケーション協会「TOEICテスト DATA & ANALYSIS 2006」(財) 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会, PDF ファイル 9p. (2007b)

(URL : <http://www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2006.pdf>)

(財) 国際ビジネスコミュニケーション協会「TOEICスコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表」(財) 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会, PDF ファイル 1p. (2007c)

(URL : <http://www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/proficiency.pdf>)

桑本裕二「高学年・専攻科における英作文指導の必要性とそのあり方—秋田高専における現状をふまえて—」『秋田工業高等専門学校研究紀要』第41号, 56-62, (2006)

桑本裕二・菅原隆行「5年次学生に対する長文読解およびオーラルレポートの実践—英語の実用的読解力および表現力養成をねらって—」『秋田工業高等専門学校研究紀要』第42号, 58-65, (2007)

菅原隆行「低学年における英語の基礎力とTOEICの成績の関連性」『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』第24号, 55-63, (2005)

鳥飼玖美子『TOEFL・TOEICと日本人の英語力』講談社現代新書, (2002)

山田雄一郎『日本の英語教育』岩波新書, (2005)